

田中康二（神戸大学）

「宣長国学における歌——敷島の歌・うひ山ぶみ・著者名——」

【要旨】

「越境する日本思想史—思想と文学の垣根越え」というテーマは、思想史学と文学研究の間に「境」が存在し、「垣根」があることを示すと同時に、それらが「垣根」を隔てて隣接していることを含意している。つまり、そこには共通点と相違点があるということである。相違点としては、学術原理としてのパラダイム、情報取得のタイムラグ、知識基盤としてのリテラシーという三点をあげることができる。そこで本発表では、知識基盤としてのリテラシー、とりわけ宣長国学における詠歌を取り上げて私見を述べたい。便宜上、敷島の歌・うひ山ぶみ・著書名という三点に言及する。

まず、寛政二年（一七九〇）秋に詠まれた「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」について、思想史家は上句に詠まれた「大和心」に関心を示し、国文学者は下句が基づく本歌（新古今集歌）に興味を示すという傾向がある。たしかに寛政二年には『古事記伝』「直毘霊」が刊行され、宣長の古道論が公になった。また、同年三月には新古今集の注釈書『美濃の家づと』が成立し、当該本歌を称賛した。だが、それが寛政二年に宣長が詠んだ歌であるという観点が欠落していると思われる。宣長は同年六月に「岩戸出し朝日ににほふ山桜さもおもしろき花盛かな」という歌を詠んでいる。この歌を背景に敷島の歌を再考したい。

次に、初学者入門書『うひ山ぶみ』（寛政十年成）の冒頭に「又歌の学び有り。それにも、歌をのみよむと、ふるき歌集物語書などを解き明らむるとの二たやうあり」という言説が存在する。この箇所はこれまで、歌学には「実作」と「研究」の二種類があると解釈されてきた。だが、これは大きな間違いである。後者は単に歌書の研究を意味するのではなく、歌を詠むことに加えて歌書の研究をするという意味であることを導き出したい。

第三として、宣長が刊行した著作の名称には、ある傾向が見出せる。「古今集遠鏡」や「源氏物語玉の小櫛」のように、歌に詠み込まれた歌ことばが書名になったものである。この系統の書名を有する著作とそれ以外の著作との間にどのような違いがあるのか。詠歌という側面からその相違点にアプローチしたい。

以上、三つの観点から「宣長国学における歌」について検討する。宣長にとって歌とは、われわれが考える以上に重い意味を有しており、研究ジャンルの別を越えてさらに追究しなければならないものである。